

エディ・ヒギンズ、ハロルド・メイバーン、スティーヴ・キューンらベテランから、デヴィッド・ヘイゼルトイン、ビル・チャーラップといった中堅~新世代まで、著名アメリカ人ピアニストの原盤制作を手がけてきたヴィーナスレコードは、その一方でイタリアン・ピアニストのステファノ・ボラーニやダニーロ・レアを他社に先駆けて日本に紹介した実績を誇る。今回リリースされる本アルバムのリリーダー、アンドレア・ポッツァも、これまで我が国ではまったく無名だったイタリアン・ピアニストだ。しかし彼の年齢やキャリアを知れば、それが過小評価であることに気づくに違いない。

アンドレア・ポッツァは1965年10月17日、イタリア北部のジェノバ生まれ。幼少の頃からピアノを始め、わずか13歳で地元のジャズ・クラブのステージに立った。ジャズとクラシックの勉強を両立させながら、16歳の時には同世代のミュージシャンと共にヨーロピアン・コミュニティ・ユース・ジャズ・オーケストラに参加。ロンドンに本部が置かれた同オーケストラには81年から85年まで在籍し、ロンドン、ローマ、ブリュッセル等、ヨーロッパの主要都市で演奏活動を行った。85年にはイタリアで開催されたジャズ・カップに、自己のトリオを率いて出演。25歳以下の若手を対象にしたコンテストで、並みいるヨーロッパの精鋭を抑えて見事「最優秀ピアニスト」の荣誉に輝いている。また92年にはSIAE主催のコンテストで、ジャズ作曲部門の首位を獲得した。この頃から国際的なジャズ・フェスティヴァルへの出演や、著名ミュージシャンとの共演が加速。アンティープ・ジャズ祭、ウンブリア・ジャズ祭、サン・レモ・ジャズ祭で実力を発揮し、リー・コニッツ、スライド・ハンプトン、ルー・タバキン、ベニー・ベイリー、デイヴ・パイク、アル・グレイらメインストリーム系のベテラン米国人との交流を通じてスキル・アップしている。

近年のキャリアで特筆されるのは、スティーヴ・グロスマンとの共演。スティーヴ・グロスマン・カルテットのメンバーとして、パリのテアトル・ド・ラ・ヴィーユ・ジャズ・フェスティヴァルや、ロンドンのロニー・スコッツ・ジャズ・クラブでプレイした。また50年代にトランベットのオスカー・ヴァルダンブリーニとのチームで、米西海岸的な2管サウンドで人気を博したテナーサックスのジャンニ・バッソのグループでも活動。『ブレイズ・バラード』(Fonola Dischi)、『フォー・ラーシュ・ガリン』、『ラッシュ・ライフ：トリビュート・トゥ・ストレイホーン』(以上Philology)等のアルバムに参加しており、90年代以降のバッソにとって最も重要なピアニストの役割をポッツァが演じたことが明らかだ。テナーサックス奏者ディック・デ・グラーフとはオランダ、スイス、インドネシアのツアーや、ノース・シー・ジャズ祭2003への出演を経験した関係があり、『シューベルト・インプレッションズ・フォー・ジャズ・クインテット』に参加している。

ポッツァの初リーダー作は2003年録音の『イントロデュースィング：イン・ウォークト… アンドレア』(Philology)。デューク・エリントン、セロニアス・モンク、バド・パウエル等のジャズ・ナンバーやスタンダードに加え、ポッツァの自作2曲も収録しており、モダン・ジャズ・ピアノの基本を押えたスインガーぶりを発揮した内容。エンリコ・ラヴァがブックレットに推薦文を寄せているのも要注目である。ベースのルチアーノ・ミラネーゼはポッツァと同郷で、ラジオ・テレビ番組、フェスティヴァル出演、レコーディング参加の経験も豊富だ。アート・ファーマー、ジョー・バス、チェット・ベイカー、カーティス・フラー、ケニー・ドリュー、トゥーツ・シールマンスら、ピッ

- | |
|--|
| Sweet Lorraine
スウィート・ロレイン |
| Andrea Pozza Trio
アンドレア・ポッツァ・トリオ |
| 1. イエスタデイズ
Yesterdays (J. Kern)(6:44) |
| 2. アイラブ・ユー
I Love You (C. Porter)(5:28) |
| 3. スウィート・ロレイン
Sweet Lorraine (C. Berwell)(5:11) |
| 4. アローン・トゥゲザー
Alone Together (A. Schwartz)(5:20) |
| 5. オール・トゥ・スーン
All Too Soon (D. Ellington)(4:31) |
| 6. クレイジー・ヒー・コールズ・ミー
Crazy He Calls Me (C. Singman)(6:32) |
| 7. イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー
If I Should Lose You (R. Rainger)(4:57) |
| 8. イフ・アイ・ハッド・ユー
If I Had You (T. Shapiro, J. Cambell, R. Connelly)(5:58) |
| 9. アイル・ビー・シーイング・ユー
I'll Be Seeing You (S. Fain)(5:33) |
| 10. アイ・ウォント・トゥ・ビー・ハッピー
I Want To Be Happy (V. Youmans)(4:34) |
| 11. オーソン
Orson (B. Strayhorn)(2:29) |
| 12. プア・バタフライ
Poor Butterfly (R. Hubbell)(5:30) |

アンドレア・ポッツァ Andrea Pozza (piano)
ルチアーノ・ミラネーゼ Luciano Milanese (bass)
ステファノ・パニョーリ Stefano Bagnoli (drums)

録音：2005年1月20、21日
モンディアル・サウンド、**ミラノ**

© © 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*
Produced by Tetsuo Hara .
Recorded by Benedict Frassinelli at Mondial Sound in Milano on January 20 and 21 , 2005.
Mixed and Mastered by Venus 24bit
Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Artist Management : M. G. M. Produzioni Musicali.
Cover Photo : ©Jeanloup Sieff / G. I. P. Tokyo.
Artist Photos by Tetsuo Hara. Designed by Taz.

グ・ネーム多数。ドラムスのステファノ・パニョーリは63年ミラノ生まれ。クラーク・テリー、ジョニー・グリフィン、ダスコ・ゴイコヴィッチ、チューチョ・ヴァルデス、ジョルジュ・ロベール、エリック・アレキサンダーら、こちらも欧米の著名ジャズメンとの共演が多いイタリアの中堅である。ポッツァ+ミラネーゼ+パニョーリはジャンニ・バッソ・グループのレギュラー・メンバーでもあることから、ポッツァ・トリオはバッソ・グループから派生したユニットと考えることもできるだろう。ポッツァ関連では他にブルーノ・マリーニ (sax,fl)らとの共同名義作『ピバップ・インポシブル』(Azzurra Music)がある。本アルバムは『イントロデュースィング』に続く約2年ぶりとなるポッツァのトリオ第2作で、メンバーは前作と同じ顔ぶれ。プログラムはほとんどが有名なスタンダード・ナンバーで占められており、ポッツァのようなタイプのピアニストの本邦デビュー作としては相応しい選曲と言っていいい。

イエスタデイズ
33年のミュージカル「ロバータ」の挿入曲で、ジェローム・カーンの代表的な名曲。無伴奏ピアノ・ソロで始まり、トリオのテーマではポッツァの力強い演奏が印象的だ。ピアノ・タッチの重量感はいんパクト大。ソロを聴かせるベースも骨太なサウンドである。

アイ・ラヴ・ユー
コール・ポーター作詞・作曲による44年のミュージカル「メキシカン・ハイライド」の挿入曲。ビル・エヴァンス・ヴァージョンに比べれば明らかのように、ここでのポッツァはスインガーの面目躍如。パニョーリの巧みなブラッシュ・ワークにも注目したい。

スウィート・ロレイン
50年代にナット・キング・コールのヴォーカルでヒット。ここでも無伴奏ピアノ・ソロで演奏が始まる。テーマに続きベース・ソロへ移行。ポッツァは速いパッセージを繰り返すが、全体的には寛いだ雰囲気を醸し出している。ブルージーなエンディングも楽しい。

アローン・トゥゲザー
ソニー・ロリンズ、エリック・ドルフィー、リー・コニッツらサックス奏者の名演が多いディーツ&シュワルツ曲。好調なポッツァをブッシュするドラムスのパニョーリのプレイが聴き逃せない。

オール・トゥー・スーン
デューク・エリントンが楽団の絶頂期だった40年に書いたバラードの名曲。ポッツァは原曲の案想を踏まえて、ミディアム・スローにアレンジ。アップ・テンポのポッツァももちろんいいが、このように肩の力を抜いたプレイにも好ましい味わいが反映されている。

クレイジー・シー・コールズ・ミー
ポッツァはピアノ・ソロで楽曲の雰囲気을提示するスタイルが好きなんだ、ということを変えて思う。正調バラードでエンディングまで進み、別の一面を披露。

イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー
ロビン~レインジャーのソング・ライター・チームによる名曲。この曲に歴史的な新解釈を加えたのはキース・ジャレットだったが、ポッツァはスインギーかつ躍動的なプレイを賣っている。おそらく楽曲本位の選曲なのだろう。自信に満ちた演奏を展開する。

イフ・アイ・ハッド・ユー
イギリス生まれのスタンダード曲で、アート・ブレイキーヤリー・コニッツ・ヴァージョンで知られる。ここでもポッツァは饒舌だ。メロディアスなベース・ソロに続いて、パニョーリのブラッシュとの間で交わされる4パースも鋭い。懐の深さも感じさせる1曲。

アイル・ビー・シーング・ユー
ビリー・ホリデイが取り上げたことで名曲入りした、38年のミュージカル・ナンバー。ポッツァはマイルス・デイヴィスの「バイ・バイ・ブラックバード」を想起させるテンポで、リズムカルにスイング。後半の4小節交換ではパニョーリのブラッシュが光る。

アイ・ウォント・トゥ・ビー・ハッピー
バド・パウエルの決定的名演が残されているヴィンセント・ユーマンスのナンバー。これまでのトラックとは趣を変えて、ポッツァがバビッシュなアプローチを展開しているように感じさせるのは、パウエルを意識しているからだろうか。不協和音を交えた力演だ。

オーソン
デューク・エリントン楽団が50年代にレコーディングしたエリントン&ビリー・ストレイホーンの隠れ名曲に目をつけたあたり、本作では最も意外性に富む。しかもこれは唯一のソロ・ピアノ。哀愁味を湛え、少し憂いを帯びたメロディ・ラインが余韻を残す。

プア・バタフライ
ブッチーニの有名なオペラ「蝶々夫人」に触発されて生まれたナンバー。このリラックスしたテンポは、クラブ・パフォーマンスのアンコールにも似たムードだ。小粋なピアノの語り口は、ポッツァの経験豊かな音楽性を物語っている。